

重箱の隅ほじく里的翻訳論

古
山
登

どこの局だったか、何月何日の放映だったかは覚えていないが、ワイド・ショーで「SUKIYAKI（スキヤキの歌）」が、今年になってからニューヨークのヒットチャートに約十年ぶりに顔を出していることを知らされた。

「スキヤキの歌」は、今から三十年以上も前になる昭和三十六年、航空機事故によって不慮の死を遂げた坂本九によって歌われ全国に大流行した「上を向いて歩こう」（作詞・永六輔、作曲・中村八大）の米国版で、かつてアメリカの権威ある音楽誌『ビルボード』で昭和五十八年八月、三週間にわたってトップチャートを維持し話題になった。

ところで、あの歌詞がどんな英文になって歌われているのか、歌題の「上を向いて歩こう」と「SUKIYAKI」とではかなりニュアンスが異なるので歌詞もかなり変わってしまったのではないかと関心を持っていた。

そこで「SUKIYAKI」の歌詞と同詞の直訳「上を向いて

歩こう」の歌詞を併記してみると――。

SUKIYAKI

IT'S ALL BECAUSE OF YOU
I'M FEELIN' SAD AND BLUE
YOU WENT AWAY
NOW MY LIFE IS JUST A RAINY DAY
I LOVE YOU SO
HOW MUCH YOU'LL NEVER KNOW
YOU'VE GONE AWAY AND LEFT LONELY

スキヤキ（好き焼き）の歌

なにかも、あなたのせいよ
悲しくて、憂うつな気分だわ
あなたは行ってしまった

だから私の人生は雨降りつづき

とっても愛しているのよ

どんなに愛しているか、あなたは分っていないのね
あなたは行ってしまった、私をひとりぼっちにして

上を向いて歩こう

上を向いて歩こう

涙がこぼれないように

思い出す、春の日

ひとりぼっちの夜

上を向いて歩こう

滲んだ星を数えて

思い出す、夏の日

ひとりぼっちの夜

幸せは雲の上に

幸せは空の上に

上を向いて歩こう

涙がこぼれないように

泣きながら歩く

ひとりぼっちの夜

というもので、両詞に共通するのは「上を向いて歩こう」の「ひとりぼっちの夜」と「SUKIYAKI」の「LONELY」くらい、他は前者が失恋男の歌であるのに対し後者は棄てられた女の嘆節となっているなど、内容も歌題同様思い切った改変が行われていることが分る。

尤も、曲が優先する歌曲の場合、漢字圏と欧文圏の間では、歌詞

の思い切った意識が行われることは珍らしいことではなく、例えばフランスのシャンソン「SOUS LES TOIS DE PARIS」（訳題

「巴里の屋根の下」の場合——

Quand elle eut Vingt ans (原詞)

彼女が二十歳になった時 (原詞直訳)

なつかしの (日本版、以下ゴチック)

sa vieille maman

彼女の年老いた母親が

思い出し

Lui dit un jour tendrement

或る日彼女に優しく言った。

さしぐむ腫

Dans notre logement

私たちの家で

なつかしの

J'ai peine souvent

私はよく心を傷めたものぞ

思い出し

pour te l'ever fallait de l'argent

お前を育てるのにお金が要ったからね

溢れる涙

Mais t'as compris, un peu plus chaque jour

でもお前は日一日と少しずつ分ってくれるようになった
マロニエ、花は咲けど

Ce que c'est le bonheur, non amour

私の愛こそが幸福というものなんだということが

恋しの君いずい

Sous les toits de Paris

パリの屋根の下で

巴里の屋根の

Tu vois ma petite Nini

あなたは私の可愛いニニを見る

下に住みて

(以下略)

といった按配で、ここでも共通しているのは「パリ(巴里)の屋根の下」だけであって、他は換骨奪胎ともいえない程変わり果てている。

人は歌謡曲を聞いたり歌ったりする場合、メロディーと同時に歌詞についても、好悪の要因にする。とすると、「SUKIYAKI」を聞いたり歌ったりするアメリカ人と「上を向いて歩こう」を愛唱する日本人、「SOUS LES TOITS DE PARIS」をロクをむンリッ子と「巴里の屋根の下」に耳を傾ける日本のシャンソン愛好家とは、それぞれ同じ歌を歌ったり聞いたりしているようで実は異なる歌をそれぞれ聞いたり歌ったりしていることになりはしないか。

そして、もう一つ興味を覚えたのは、「SUKIYAKI」では「ユー・ブルー、アウエイ・デイ・ソー・ノー」「SUS LES TOITS DE PARIS」では「ヴァンタン・マン・タンドルマン・ロジューマン・スパン・ラルジャン」と、いずれも脚韻を踏んでいることである。漢詩以外には押韻には馴染みのうすい日本人にとっては、こん

な大衆的な歌謡の詞にまで押韻が重んじられていることは驚異であり、詞(詩)、語感に対する彼我の違いを感じざるを得ない。

さて、これまで和欧・欧和の場合のそれぞれ一曲づつを選んで意見を述べてきたが、次は三ヶ国語にわたっている歌曲について考察してみよう。

対象として選んだのは私たちにも馴染み深い「螢の光」。この歌は、元はスコットランドの民謡「Auld lang syne」「なつかしき年月」である。そして、この歌は発祥の地であるスコットランドでは今は殆ど歌われていないとのことであるが、英国をはじめ世界各国で多くの人々に歌い継がれている名曲である。

先ず、英語版は、

Should old acquaintance be forgot

And never brought to mind?

Should old acquaintance be forgot

And days of auld lang syne?

Chorus:

And days of auld lang syne, my dear,

And days of auld lang syne,

Should old acquaintance be forgot

And days of auld lang syne?

(以下略)

同文直訳

昔馴染みの友は、忘れ去られ
ふたたび思い出されることもないのだろうか?

昔馴染みの友は、忘れ去られ、
過ぎ去ったなつかしい年月もまた、同じ運命なのだろうか？

(コーラス)

過ぎ去ったなつかしい年月も、親愛なる友よ

過ぎ去ったなつかしい年月も

昔馴染みの友も、忘れ去られ

過ぎ去ったなつかしい年月もまた、同じ運命なのだろうか？

次は仏訳版

Les bon amis du temps passé

Vivront dans notre cœur,

Jamais ne seront ouvrier

Les amis du temps passé

Chantons avant de nous quitter.

Chantons de notre amitié

Jamais ne seront ouvrier

Les amis du temps passé

(同文直訳)

過ぎ去った日々の良き友は

われわれの胸の中に生きつづけるだろう

決して忘るまいぞ

過ぎ去った日々の友達のことを

歌おうよ、散り散りになる前に

歌おうよ、我らの友情を

決して忘るまいぞ

過ぎ去った日々の友達のことを

そして我が日本の「螢の光」

螢の光 窓の雪

文読む月日 重ねつつ

いつしか時も 過ぎのとなを

明けてぞ 今朝は 別れ行く

いずれもテーマは「別れ」。そして、英語と仏語はさすが同根だけに、詞の内容もそっくり同じというわけには行かないが、相似た感じと言っている。しかし「螢の光」となると「卒業式の歌」ということで、前二者とはいささかTPOが異なるだけに詞だけを並べて書くと前二者と後者とは別の歌のように感じられる。尤も、「別れの曲」に学問・教育・道徳の先進国として古来日本をリードして来た中国故事に範を取って「螢の光」を組合わせたあたり、軍事と教育を二本柱として近代化を進めていた開化期日本人の知恵が感じられなくもない。しかしこの歌が「卒業式」という儀式に際してだけ歌われたのは戦前の話で、戦後は、新しい風俗や行事の中で、キヤバレーの閉店、映画演劇の終演、パーティのお開きなど「終り」を知らせる手段としてメロディーだけが流されることが日常的になっっている。つまり、螢雪の功とか、読書とかの要素を取り去ってしまふと単なる「別れの曲」になってしまうわけで、このような使われ方の方が原曲の主題に添っているようだ。

多国語で歌われる歌曲には、他に讃美歌や「インターナショナル」などがある。

讃美歌は、ここでは二応措いて、日本版では「起て 飢えたる者よ 今ぞ日は近し 醒めよ わが同胞 暁は来ぬ 暴虐の鎖断つ

日 旗は血に燃えて 海を隔てつ我等 腕結び行く いざ戦わ
ん、いざ 奮い立て、いざ 嗚呼！ インターナショナル 我等が
もの いざ戦わん、いざ 奮い立て、いざ 嗚呼！ インター
ショナル 我等がもの」という歌詞で知られている「インターナシ
ョナル」に就いて簡単に触れてみたい。

この歌の原詞はフランス語だが、ロシア語に翻訳されソビエト共
産党の党歌となり、党則国家のソ連では国歌と同じ重さを持つ歌と
して知られるようになった。また、当然のことながら、共産党の存
在する国々ではそれぞれの国の国語に翻訳してそれぞれの国の共産
党員によって愛唱されることになる。この歌はその他にも、ソビエ
ト共産党大会や共産党の国際的集会では閉会直前に参会者全員が総
員立ち上って高らかに歌われる。しかし、メロディーは一つでも、
歌詞の方は合唱することを予想して訳されているわけではないから、
国籍によって異なる言葉が不協和的にぶつかり合い、誠に雑然たる言
葉のキャオスとなつて堂内に充満する……ところが傍点部分に到つ
て見事に音声が完全に一致し国際共産主義の「団結と連帯」が誇示
される……一方、日本版は「嗚呼！」の感嘆詞が頭に入るために他
国より一拍遅れてしまい、しばし独り除け者になつてしまったよう
に感じてしまった——という話を古い元共産党員から聞いたことが
ある。

また、詠嘆詞もさることながら、最も前衛的な内容を盛りこんだ
歌詞であるべき筈のこの歌が、古めかしい文語調であるのも、曲と
内容が極限されているために自ずから語彙の選択範囲が狭められた
結果でもあろうが、いかにも日本的な感じで、日本共産党の生い立
ちなども推測されて興味深い。さらに一步を進めて、各国語に訳さ

れたそれぞれの「インターナショナル」を仔細に比較してみると、
微妙に異なる各国共産党の「革命」に対する考え方や国柄の一端
が窺われて面白いだろうと思われる。

以上、思いつくままに、二国以上で歌われている歌の詞について、
漫然と文字を書き連ねてきたが、翻訳という作業が宿命的に負わさ
れている性格がそこに特徴的に表れているのではないかという思い
が以前からあったからである。

翻訳には、大まかに分けて、意訳と直訳があり、これらの組合せ
方によって名訳にもなり悪訳にもなる。逐語的な直訳は往々にして
生硬で読み辛く理解し難いことがあり、意訳は逆に、読み易く理解
し易い一面がある代りに誤訳を生む危険性を抱えているようだ。

そこで、もう一度日本版「巴里の屋根の下」に戻り、(以下略)
の部分を追記すると、

「(承前) 樂しかりし昔 燃ゆる瞳 愛の言葉 やさしかりし君よ
鐘は鳴る 鐘は鳴る マロニエの並木道 巴里の空は碧く晴れて
遠き夢をゆする」

であるが、この訳詞の「思い出」「瞳」「涙」「マロニエ」「愛の言
葉」「鐘」「空」「夢」などに当る言葉は、原詞のどこにも見当らな
い。とすると、これは意訳というより殆ど作り替えといふべきでは
なからうか。それでもこの歌が「代表的なシャンソン」として日本
人に親しまれているのは、歌曲の場合、優劣の基準は結局メロディ
ーの良し悪しであつて詞はしよせん補助的な存在(殊に訳詞の場合
は、歌題の雰囲気さえ伝えられればよい)に過ぎないようにも思わ
れる。つまり、たかがシャンソンということでもあろう。

しかし、曲という制約のない他の分野、中でも詩や小説など「言葉の芸術」の場合は同日ではない。安直に言葉を置き替えたりして同じ作品ではなくたってしまふ。だから翻訳家には、常に原作の国語に通曉しており、同時に自国語の表現力にも優れていることを要求されることになるが、この条件を両つながら満たし得る翻訳者を見出すことはなかなか困難である。主として訳される側の、二十世紀世界文学の巨人アンドレ・ジイドでさえ「初めの頃には自分の作品の翻訳が、私に従属することを求め、フランス語の原文に最も近く行くものが最上のように思われた。しかし忽ち私は自分の誤謬に気がつき、現在では私の翻訳者に決して私の言葉や句に束縛されるように、私の作品の上いつまでも身をかがめぬようお願いする」(『アンドレ・テリブ宛書簡』河盛好蔵「翻訳論」(『仏蘭西文学随想』昭和16年))と言つて、完全な復刻的翻訳への期待を放棄しているように、完全無欠な翻訳は望むべくもないのが実状であらう。

翻訳は難かしい仕事なのである。

日本の近代文化は翻訳文化だと言われる。実際、明治維新以降の日本の文明開化政策はことごとく「ヨーロッパに追いつき追い越せ」であつたと言つて過言ではない。

文学も例外ではなく、二葉亭四迷や紅露逍鷗を以て日本近代文学の祖とするのが普通だが、二葉亭はロシア文学、鷗外はドイツ文学、逍遙はイギリス文学をそれぞれ自らの文学的出発の起点としており、その後も、多くの作家はヨーロッパ文学の影響下に育っている。尤も、二葉亭や鷗外や逍遙の世代の文学者たちは、原文で読み、自ら

翻訳せざるを得ない状況だったから、彼ら自身は翻訳の恩恵に俗することはなかったわけだが、彼らの訳業によって日本の近代文学が発展したことは間違いない。

このことは、大正文学から昭和十年代の作家の一人々々を見れば納得されることだと思ふが、例えば「自然主義」の解釈など、ヨーロッパの文学思潮や個々の作品が正確に輸入紹介されていたかどうかには就いては疑問がないでもない。

このことは、嘗つて総合雑誌「展望」が「誤訳・珍訳・悪訳」に就いて、それぞれ実例を挙げて大々的に指摘し、外国文学者たちを騒然とさせたことがあつたが、この問題は、あれから四十数年経った今もまだ問題として残っている。そして、今後も「意識か直訳か」の問題が言葉の壁を乗り越えて調和する解決がない限り続いて行くことだろう。

一方、文化的国境の意識が日本と欧米の間で弱まり、ドナルド・キーンとかサイデンステッカーといったような秀れた日本文学研究家も現れた今日、日本も明治以来の欧米文化の影響下を脱して文学面でも国際化し、川端康成、井上靖、三島由紀夫、遠藤周作、安部公房など現代作家の諸作品や井伏鱒二の「黒い雨」などが欧米で翻訳されて評価されていると聞くが、彼らなりに言葉や表現法の違いをどう解決して訳出しているのか、まさか「上を向いて歩こう」が「SUKIYAKI」に変身した調子とは違うと思ふが、興味もあり気にもなる。